日本感情心理学会第 22 回大会若手研究者連続講演「集団間紛争と怒り」

“我々”としての感情とは何か？

―集団間紛争における情動の役割を中心に―

縄 田 健 悟
（九 州 大 学）

人は自分に不公平に扱いをされれば怒りを覚え，自分の身の危険に際しては恐怖を覚え，自分の仕事を高く評価されれば喜びます。この意味で人の感情は，自分に関する出来事から生じるものだといえます。

しかし，人は自分だけではなく，他者に起きた出来事に対しても，感情が喚起されます。この他者から生じる感情の側面の一つは，もう一つの連続講演でも扱われる共感であり，心理学でも一大潮流を形成している研究領域ですが，本講演では，集団という視点から「我々としての感情」を考えていきたいと思います。

たとえ自分とは直接の関連がなくとも，人は自分の所属集団に対する出来事で一喜一憂します。自分の大学のスポーツチームが優勝すれば誇らしく感じ，自分の会社が侮辱されれば怒りを感じます。このように人は自分の所属集団に起きた出来事から集団ベースの感情が喚起されることがあります。

このような集団レベルの感情は様々な社会場面で生じるものですが，特に重要となるのが集団間紛争場面です。集団間紛争とは，集団と集団の間で生じる争い事のことであり，戦争や民族紛争，組織の部門間対立や不良集団間の諍いなどが挙げられます。例えば，イスラエルの空爆によってあるパレスチナ人が死亡したときには，同じパレスチナの人々は，まるで自分が被害を受けたかのように怒りや憎しみ，悲しみを感じ，ときには自らの命をかけた報復的自爆攻撃が行われることさえあります。集団の一員であることによって怒りや恐怖の感情は喚起され，そしてそれは“感情的”だからこそ集団間紛争は容易には解決されません。

演者はこれまで，社会心理学や集団力学の視点から集団間紛争を研究してきました。本講演では，社会心理学の理論研究としての集団間情動理論と，現実の集団間紛争場面を題材にした調査研究に関する国内外の知見を紹介いたします。その中で，紛争場面において集団レベルの情動が担う役割に関してフロアの先生方を交えて議論を行いたいと考えています。